

4 道徳の時間の指導の充実

道徳の時間が資料の読み取りに終始する授業になってしまいます。児童生徒の考えや思いを引き出しながら、道徳的実践力の育成を図るためには、どんな工夫をすればよいのでしょうか。

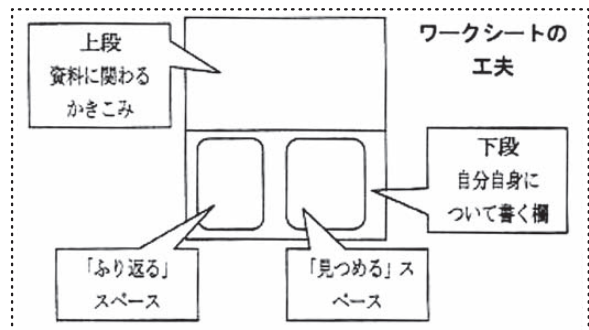
【ポイント】

- 道徳教育推進教師が中心となって、道徳の時間の基本的な学習過程の共通理解を図りましょう。
- 板書やワークシート等を工夫し、児童生徒の考えや思いを視覚的に捉えやすくしたり、児童生徒が考えを広げたり、思いを深めたりしやすくする手立てを工夫しましょう。
- 役割演技や動作化、小集団での話し合い活動、TTなどを効果的に活用しましょう。
- 道徳の時間の学習の進め方、特に、話し合いやグループでの意見交換で、どんなことを大事にして話し合えばよいのかを、児童生徒が理解して取り組めるようにしましょう。

1 自分の思いや考えをもたせる工夫

(1) ワークシートの工夫

資料を読んで考えたり感じたりした自分の思いを書く時、または、自分を見つめたり振り返ったりする活動の際、ワークシートの活用は有効である。ワークシートの構成を工夫することで、児童生徒が自分の思いや考えをもちやすくなる。



(2) 自分の思いや考えを可視化する工夫

児童生徒の思いや考えを可視化することで、自分の考えやその理由についても考えるようになり、道徳的価値についての見方や考え方を深めることができる。

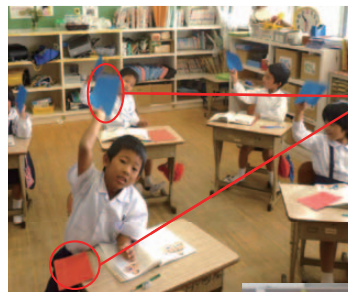
【可視化の例】

ア 気持ちカード

4色（赤・ピンク・グレー・黒）に色分けされたカードでその時の自分の気持ちを考えて示す。

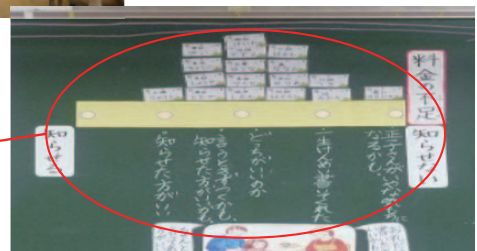
イ ハート図

ハート型の図の中



自分の思いや考えに合うカードを選び、なぜそのカードを選んだのかを考えられるよう問いかけを行った。このカードは、児童の実態や発達段階に応じて弾力的に使用するようになっている。

主人公の心の葛藤について、最も近い位置を選択してネームプレートをはった(価値観の類型化)。また、「どうしてそう考えたのか」と発問をすることで、理由を問い、自分の考えをしっかりともてるようにした。



を、自分の気持ちの程度に合わせて赤と青の色でぬる。

ウ ネームプレート

自分の考えや気持ちがどれに近いか考えて、板書などで該当するところにネームプレートを貼らせるなど、価値観を類型化して示す際に活用できる。

2 グループでの話し合い活動を充実させるポイント

(1) 話し合い活動の目的を明確にする。

話し合い活動では、以下のような目的が考えられる。

《話し合い活動の目的》

- ・ 自己の考え方を、友だちとの関わりを通して、広げたり深めたりする。
- ・ 相反する考えを聞くことで、相手の立場に立って考えることができる。
- ・ 多様な考え方を聞くことで、よりよい考え方を追求することができる。
- ・ 自分の考えが整理できないとき、他者の考えを参考にしながら、自分の考えをまとめることができる。
- ・ 相互の関わりの中で、よりよい人間関係を築いていくことができる。

(2) 自分の考えをしっかりとらせる。

自分の考えをしっかりとって話し合いに臨むことが、グループ内でしっかりと発言できることにつながる。まず、話し合いに臨む前に、自分の考えをまとめる時間を確保する。一方、時間が十分であっても、内容によっては、考えをまとめきれない児童生徒がいることも予想される。それらの児童生徒には、話し合い活動で、友だちの考えを聞き、自分の考えに生かすよう助言や声掛けをする。

(3) 話し合い活動のねらいをリーダーに伝える。

発達段階に応じて、グループのリーダーに話し合い活動のねらいを伝えることも一つの方法である。

例えば、ワークシートに自分の考えをまとめさせる時間に、グループのリーダーを集め、話し合い活動のねらいを伝える。話し合い活動の目的は、ただ「話し合うこと」ではなく、「ねらいとする道徳的価値に迫ること」であり、そのために考えさせたい質問や視点もある。それらを事前にリーダーに示すことも話し合いを有効に進める方法となる。

(4) 対話を促す話し合いの進め方をさせる。

リーダーや司会者を決めて、話し合いを進めるが、一人の発表に対して、「なぜそう思ったのか」と理由を質問したり、「自分も同じように思う」など、発表に自分の考えを重ねて返したり、互いに対話して意見を交換できるようにする。質問したり、質問に答えたり、相手の考えと自分の考えを比べたりする中で、自分の考えの広がりや深まりがみられるようになる。

(5) 話し合い活動の後、再度自分の考えを整理させる。

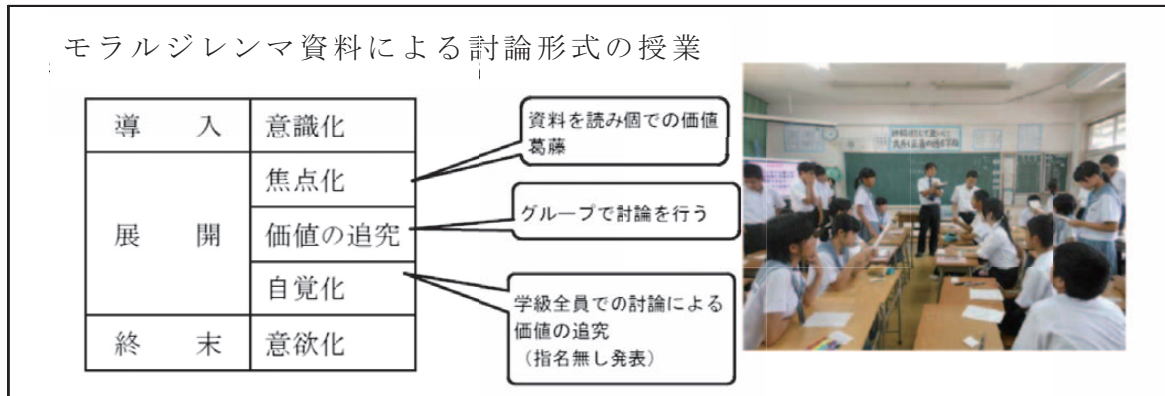
話し合い活動の後に、もう一度自分の考えを書くなど、考えを整理する時間を確保する。ノートやワークシートに書く場合は、最初に書いた自分の考えに朱書して書き加えるなど、話し合い前後の自己の考えの変容に気付くことができるように工夫する。

3 討論形式の授業の工夫

基本的な学習過程を踏まえるとともに、資料やねらいに応じて、多様な学習の形態等を工夫することも効果的である。

例えば、モラルジレンマ教材などで、討論形式の授業を行うことにより、多様な意見を引き出したり、友達の意見を参考にしながら、自分の価値に対する考え方を確認させたりすることができる。

また、グループでの話し合いと組み合わせることで、自分の考えをもって学級全体の討論に積極的に臨ませることができる。



4 TTによる授業の工夫

道徳の時間で、担任以外が関わりをもつことも工夫の一つである。より児童生徒の考えに寄り添った授業となり、内面に働き掛ける指導が期待できる。

具体的には、学級担任が中心となって授業を進めながら、校長や教頭、養護教諭や栄養教諭等、学級担任以外の教師とのTTを行うことが考えられる。

指導に当たっては、T2の教師が板書を行うだけの役割にならないように、TT指導のねらいや役割分担などについて、共通理解を図ることが大切である。

【TTによる授業の効果】

- 役割分担をしながら協働することにより、より多くの児童生徒の表情や雰囲気をつかえて、効果的に意見を引き出すことができる。
- 例えば、T1の発問に対する児童生徒の反応を2人で見取りながら、T2が板書し、T1は児童生徒へのさらなる問いかけを行うことで、児童生徒の反応をうまく生かしながら発問や意見を引き出すことができる。
- 2人で机間巡視を行い、児童生徒の考えを把握するとともに、意図的指名に役立てることができる。
- グループ等での話し合い活動において、助言や切り返しを行い、児童生徒の考えを深める機会を多くもつことができる。
- 専門分野等を生かした説話等を行うことができる。

また、中学校においては副担任とのTTにより、担任以外の教師も道徳の授業に関わることができ、全教師が協力し合って道徳教育を推進する取組にもなる。

【TTの授業の例】 資料名 とつげき家族（学研「中学生の道徳」1年）

| | | | | |
|-----|---------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------|-------------------------------------------------------------------------|
| | <p>2 資料を聞く。</p> <p>3 「かのこ」と父ちゃんの関係に着目しながら、印象に残ったところを発表させる</p> | <p>○ 心に残ったところに線を引きながら、範読を聞く。</p> <p>○ 二人の関係について心に残ったところを発表させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 風呂上がりにジュースを飲むところ ・ かのこがジュースを飲むのを断ったところ | <p>一斉</p> <p>一斉</p> | <p>● 「かのこ」の心情の変化に注目させる。</p> <p>● 風呂上がりのジュースの場面を捉える。</p> |
| | <p>T1・発問、意見の引きだし</p> <p>T2・構造的な板書</p> | | | <p>T1・机間指導で見取り</p> <p>T2・資料を読む</p> |
| 自覚化 | <p>7 これから「かのこ」はどんな子どもになりたいと思ったかについて考える。</p> | <p>○ 今回のことがあった後、「かのこ」はこれからどんな子どもになりたいと思ったのでしょうか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ これからもお父さんとの時間を大事にしたい。 | <p>個グループ一斉</p> | <p>● 「かのこ」を通して、自分がどのような子どもになりたいかを考えさせる。</p> <p>● なぜそのように思うのかを伝えさせる。</p> |
| | | | | <p>T1・T2</p> <p>机間指導を行い個・グループに助言を行う</p> |

児童の「問いかける力」を育てるための発問の工夫

鹿児島大学教育学部心理学科 教授 假屋園昭彦

通常、教師は発問を考える際、児童から「どんな回答を引き出すか」という児童の回答にのみ関心が向きがちになる。しかし、発問の意義はこの点にのみあるのではない。児童に考えてほしいことがらを教師は問うのである。ここでは道徳の時間における教師発問の意義を改めて考えてみたい。

児童が教師の発問に回答するという行為の重要性は、教師が立てた問いに含まれる論理を、児童が思考の中で再度なぞっていくところにある。この体験の蓄積によって、児童は自らで問いを立てる力を習得する。このことは教師発問の意義が、児童に自ら問いを立て、問いかける力を育てるところにあることを意味する。

「問い」とは論理であり、物事を見る時の視点である。そして思考は問いかけるところから始まる。自分の中にもっている問いかけが多いほど、物事の多くの面が見える。

道徳の時間の中で、児童には多くの倫理的な問いかけを体験してもらいたい。そして「世の中のこんな場面では、こんな行為に対しては、こんな問いを立てて、こんな視点から倫理的に思考を進めていくのだよ」という体験をもってもらいたい。

道徳の時間で、児童にはできるだけ多くの倫理的な問いかけを経験し、その問いを自分のなかに取り入れ、以後の生活のなかで自問自答できるようになってもらいたい。

したがって教師は児童に、「明確な答えが出た、出ないではなく、こんな問いをもち続けることが大切なのだよ」というところを伝えてほしい。「これから、こんな問いを抱き続けてほしい。こんな問いかけで人間をみてほしい。こんな問いかけができる大人になってほしい。」そうした問いかけを、教師は、発問として、あるいは対話のテーマとして、児童とともに道徳の時間の中で考えてほしい。

こうした教師発問の例として、「広い心（寛容）」という道徳的価値を取り上げてみよう。「広い心（寛容）」を扱う際、児童にはどんな「問いかけ」を体験してもらおう必要があるのか。次のような問いかけが考えられる。「どんな時に他人の失敗を許せて、どんな時に他人の失敗を許せませんか？」、あるいは「自分の失敗（過ち）への許しは、心が広いと言うのでしょうか？」。さらに「広い心とはすべてを許すことなのだろうか？」「犯罪やいじめが寛容の対象にならない理由はどこにあるのか？」。こうした問いかけを考えていくことで「広い心（寛容）」という道徳的価値の本質が浮かび上がってくる。そして、こうした「問いかけ」が「広い心（寛容）」の意味を捉える際の視点になり、思考の出発点になる。

答えの内容は、発達段階によって変わっていくであろう。大人になっても変わっていくであろう。しかし「問いかけ」そのものは変わらないのだ。これから「広い心（寛容）」を考える時、こんな問いかけで自分を振り返ってほしい、という視点を、教師発問をとおして児童に学んでもらいたい。そして教師には、授業で扱う道徳的価値について児童に考えてもらいたいこと、習得してもらいたい問いかけを、発問の工夫として考えてもらいたい。